翻　訳

女人禁制のボクシング・ジムに男装の麗人登場
〈（寸劇）「母斑（ぼはん）」〉

J・ロンドン作
辻井榮滋訳＆ノート

ジャック・ロンドン作の寸劇／ロバート＆ジュリア・フィッツシモンズのために書かれた（ロバートは有名な英国のボクサーで，ジュリアは彼の３番めの妻）

舞台…ウェスト・ベイ運動クラブの１室。中央正面近くには大きなテーブルがあり，新聞や雑誌があれこれ置かれている。左手には，ボクシング練習用のパンチ・バッグがある。右手には，壁を背に机があって，その上には卓上電話が置かれている。左手後方にはドアがある。壁のあちこちには，額に入ったボクサーたちの写真があり，そのなかでも目につくのがロバート・フィッツシモンズの１枚である。フォイル（先にたんぽを付けた練習用の剣），クラブ，ダンベル，トロフィーといったふさわしい備品もある。

〔モード・シルヴェスター登場。〕

〔彼女の服装は，夜会服，できればタキシードをまとった男性の格好である。手には名刺を持っており，脇には紙に包まれた小包をかかえている。そして物珍しそうにのぞき見しながら，テーブルまで進み出る。気が弱く，興奮し，意気盛んでいて，同時にびくびくもしている。その目は，興奮に小踊りしている。〕

モード：〔テーブルのそばに立ち止まって。〕 誰１人私を見なかったわ。みんなどこにいるのかしら。それからあの私の兄は，私は中には入れない，って言ったわ。〔彼女は，名刺の裏を見る。〕「モーディー，これが僕の名刺だ。これを使えるのなら，いいよ。でも，ドアの奥に入っちゃだめだ。僕のほうが勝ちだと思うよ。」〔誇らしげに，見上げながら。〕 そうかしら。まあ，今妹に会えれればね。妹は，もう中に入っているわよ。〔ひと息つき，あたりを見まわして。〕ここが，ウェスト・ベイ運動クラブなのね。女性は誰も立ち入り禁止。それでも，私は来てるわ，たとえ女性のように見えなくてもね。〔片方の脚とそれからもう一方の脚を伸ばして，見てみる。名刺と小包をテーブルの上にそのままにして，男のようにもったいぶって歩き，壁にかかったボクサーたちの写真を見ては，彼らの名前を音読し，それぞれにふさわしい感想を述べる。それでも，フィッツシモンズの肖像写真の前に立ち止まると，声に出して読む。〕「あらゆる戦士のなかでも最強の，ロバート・フィッツシモンズ。」〔両手を握りしめ，肖像写真を見上げて，つぶや

く。〕 まあ，すてきな人！

〔もったいぶって歩きまわりながら，男の歩みなり威張って歩く術(すべ)だと自分で思うことを真似(まね)ながら，テーブルにもどって来て，小包を開け始める。〕 そうね，男のように入ってきても，出ていくときは女の子のようにね。〔包装紙をテーブルの上に落とすと，女性の長いマントとボンネット（自動車に乗るときにかぶる婦人帽）を持ち上げる。突然，近づく足音にハッと驚き，ぎょっとしてドアのほうにちらっと目をやる。〕 まあ！　誰かがやって来るわ！〔驚きあわててあたりを見まわし，マントとボンネットをテーブル近くの床に落とし，ひと握りの新聞をつかんで，テーブルの右側の大きな革の椅子に駆け寄り，大急ぎでそこにすわる。１枚の新聞を目の前にかざして，顔を隠しながら，読んでいるふりをする。運悪く，新聞は上下が逆さまになっている。残りの新聞は，彼女の膝の上にある。〕

〔ロバート・フィッツシモンズ登場。〕

〔彼はあたりを見まわし，テーブルに進み寄り，タバコ入れを取り出し，１本選ぼうとしたそのとき，床にマントとボンネットがあるのに気づく。巻きタバコ入れをテーブルの上に置き，マントとボンネットを拾い上げる。えらく奇妙なものがクラブの部屋にあると思える。モードを見て，それからテーブルの上に名刺を見る。それを拾い上げ，引き寄せると，彼女を見てのみ込める。新聞に隠れて，彼女には何も見えない。彼はもう１度名刺を見て，読んで，わきぜりふで語る。〕

フィッツシモンズ：「モーディー。ジョン・H・シルヴェスター。」 これは，ジャック・シルヴェスターの妹のモードにちがいない。
〔フィッツシモンズは，からかおうとしていることを表情で示す。マントとボンネットをテーブルの下に投げもどすと，名刺をチョッキのポケットに入れ，椅子を選んで，腰をおろし，モードを見る。新聞が逆さまになっているのに気づいて，えらく面白がり，そっと笑う。〕 やあ！
〔新聞が，かすかな震えに振り動かされる。フィッツシモンズは，声の調子を上げる。〕 やあ！
〔新聞の震えがひどくなる。彼は，大声で語る。〕 やあ！

モード：〔新聞の上越しに顔をのぞかせ，ためらいながら口をきく。〕 や，や，やあ！

フィッツシモンズ：〔ぶっきらぼうに。〕 新聞を逆さまに読むなんて，変わってるな。

モード：〔新聞を下に置いて，気持ちを楽に見せようとして。〕 ちょっとした冗談でね。よくやるもんで。実にうまいもんだろ。

フィッツシモンズ：〔ブツブツ言って，つけ加える。〕 前に君に会ったようだが。

モード：〔すぐさま相手の顔から肖像写真に目をやり，また目をもどす。〕 そう，僕も君のこと

を知ってる…ロバート・フィッツシモンズだろ。

フィッツシモンズ：君のことを知っていると思ったよ。

モード：そう，サンフランシスコでだった。うちのみんなは，まだあそこに住んでる。僕は，ちょっと…ウフン…ニューヨーク見物をやってるのさ。

フィッツシモンズ：でも，名前はよくは覚えてないな。

モード：ジョウンズ…ハリー・ジョウンズ。

フィッツシモンズ：〔大喜びして，椅子から飛びあがり，モードのほうへ大股に歩きながら。〕そうだ。〔彼女の肩をパチッと叩く。〕

〔モードは，一撃の重圧に押しつぶされそうになり，同時にショックを受ける。そして，這(は)うように立ちあがる。〕

フィッツシモンズ：よく来てくれた，ハリー。〔彼は，痛くなるほどモードの手をかたく握る。〕もう１度，よく来てくれた，ハリー。〔彼女の手をかたく握りつづけ，腕も上下に振って動かす。〕

モード：〔手を引っこめようと必死になり，ようやく引っこめる。声のほうは，いささか力がない。〕 ええ，あのー……ボブ……そのー……再会できてうれしい。〔痛めた指を悲しげに見つめ，椅子にすわり込む。それから，自分の役割を思いだして，両脚を男のように組む。〕

フィッツシモンズ：〔右の机まで突っきって，それにもたれて，モードに向きあう。〕 サンフランシスコのあの頃，君は手に負えない若いごろつきだったな。〔クスクス笑いながら。〕 いやはや，何もかもが思いだされるよ。

モード：〔大げさに。〕 僕は手に負えなかった…ずいぶんと。

フィッツシモンズ：〔にやにや笑いながら〕 そうだとも！ あの夜，僕が君を寝かしつけたのを覚えているかい？

モード：〔身のほどを忘れて，プンプンしながら。〕 まあ，何てことを！

フィッツシモンズ：君は，……あのー……酔っぱらってたんだよ。

モード：そんなこと全然なかったよ！

フィッツシモンズ：たしかに君は，あの夜のことを忘れちゃいないさ！　クラブの窓から歩道を行く人たちの頭にシャンパンの瓶を落としだして，辻馬車の御者に暴行を加えて，おしまいってわけさ。それで，あそこでの窮地から僕が君を救って，警察と片をつけてやったのさ。覚えてない？

モード：〔ためらいながら，うなずいて。〕　そう，だんだん記憶がもどってきたよ。あの夜は僕も，ちょっと酔っぱらっちゃった。

フィッツシモンズ：〔狂喜して。〕　ちょっと酔っぱらったって！　何しろ，君を寝かしつけられるまで，君は自分の生きざまの話をしつこく僕にしてたものな。

モード：そうかい？　そんなの覚えてないよ。

フィッツシモンズ：まあ覚えてないだろうな。あの時までのことを何も覚えてなかったんだから。君は僕の首のまわりに抱きついてさ―

モード：〔話の邪魔をして。〕　おお！

フィッツシモンズ：それから君は，何度も何度も「ボブ，ねぇボブ。」ってくり返してたよ。

モード：〔ぱっと立ちあがって。〕　おお！　そんなこと決してしてやしない！〔思いだしながら。〕　たぶん，きっとそうだったんだろう。あの頃，ちょっぴり手に負えなかったのは，認めるさ。でも，今は分別があるよ。若気の至りで道楽をしたが，もう落ち着いたよ。

フィッツシモンズ：それは結構なことだ，ハリー。あの頃君は，かなり速いペースだったもんな。〔ひと息ついて，モードはうなずく。〕　まだパンチ・バッグを叩いてるの？

モード：〔すぐに驚きあわてて，パンチング・バッグをちらっと見ながら。〕　いや，まだあのこつをのみ込んでないよ。

フィッツシモンズ：〔非難するように。〕　君は，僕が教えたあの左右の腕，肘（ひじ），肩の動きを忘れてしまってないよな？

モード：〔ためらいながら。〕　な―い―よ。

フィッツシモンズ：〔左手のバッグのほうへ進みながら。〕　じゃあ，来るんだ。

モード：〔しぶしぶ立ちあがって，ついて行きながら。〕 それより君がバッグを叩くのを見てみたいな。

フィッツシモンズ：あとで，やるよ。君が先にやれよ。

モード：〔驚きあわててバッグをじろじろ見ながら。〕 いや，君が。僕は練習不足で。

フィッツシモンズ：〔まじまじと相手を見ながら。〕 今夜は何杯飲んだんだ？

モード：１杯も。飲まないんだ…つまり…えー…時折だけさ。

フィッツシモンズ：〔バッグを指し示して。〕 それじゃ，やるんだ。

モード：いや，練習不足なんだよ。すっかり忘れっちまったんだ。それに，１つ発見をしたもんでね。

〔間をおいて。〕

フィッツシモンズ：えっ？

モード：ぼ…ぼく…君は，僕がいつも勢いのない声…ソプラノと言ってもいいぐらいの声をしてたのを覚えているだろ？

〔フィッツシモンズはうなずく。〕

モード：それが，完全な裏声（フォルセット）だとわかったんだよ。

〔フィッツシモンズはうなずく。〕

モード：以来ずっとその練習をしててね。専門家だって，別の部屋にいたら，女性の声だと判断するだろうね。君だって，背を向けて僕が歌うのを聞けば，そうだろうよ。

フィッツシモンズ：〔訝（いぶか）しげに笑っていたが，疑い深くなる。〕 なあ，若僧よ。君はいかさま師だと思うよ。ハリー・ジョウンズなんかじゃ全然ないだろ。

モード：いや，ハリー・ジョウンズだよ。

フィッツジェラルド：信じられんな。彼は，君より重かったぜ。

モード：去年の夏熱を出して，大分体重が減ったんだ。

フィッツシモンズ：酔っぱらって寝かしつけられねばならなかったハリー・ジョウンズなんだな？

モード：そ―う―さ。

フィッツシモンズ：たしかはっきりと覚えていることが１つある。ハリー・ジョウンズには，膝に母斑（あざ）があった。〔と言って彼は，モードの両脚に鋭い目つきを送る。〕

モード：〔まごついて，それから，自分のごまかしを続けようと決心して。〕 そう，ほらここにね。〔と言って右の脚を出して，触る。〕

フィッツシモンズ：〔大得意になって。〕 違う。あれは，もう一方の膝だった。

モード：そんなことわかっていて当然なのにね。

フィッツシモンズ：君にはあざなんか全然ないさ。

モード：いや，あるよ。

フィッツシモンズ：〔いきなりモードに飛びつき，その脚をつかまえようとして。〕 それじゃ，確かめようじゃないか。さあてと。

モード：〔あわてふためいて彼からあとずさりすると，フィッツシモンズは観客に向かってわきぜりふを言う。〕 彼が僕のあざを見たいんだってさ。

フィッツシモンズ：〔弱い者いじめをしながら。〕 それじゃバッグを叩いてみろ。〔モードは頭を横に振る。〕 君はハリー・ジョウンズじゃないな。

モード：〔パンチ・バッグに近づきながら。〕 いや，僕はハリー・ジョウンズさ。

フィッツシモンズ：それじゃ，打ってみろ。

モード：〔やってみようと決心をして，何度かいいパンチをバッグにあて，それから，バッグが鼻にあたる。〕 ああ！

〔立ち直ると，鼻をさすりながら。〕 練習不足だって言っただろ。君がバッグを打ってみろ，ボ

ブ。

フィッツシモンズ：いいよ，もし君がそのすばらしいソプラノの声でやれることを身をもって証明しようというんならな。

モード：そんなことをする勇気はない。みんながクラブに女がいると思うだろう。

フィッツシモンズ：〔頭を横に振りながら。〕 いや，そんなことはないさ。みんな試合に行っちゃったから。このビルには，人っ子１人いやしない。

モード：〔びっくりして，力のない声で。〕 このビル…には…人っ子…ひとり…いやしないって？

フィッツシモンズ：人っ子１人もな。君と僕だけさ。

モード：〔あわててドアのほうへ向かって駆けだして。〕 それじゃ，行かなくちゃ。

フィッツシモンズ：何を急いでるんだ？　歌えよ。

モード：〔あらたな決意をして引きかえしながら。〕 君がバッグを叩くのを見せてほしい，…えー…ボブ。

フィッツシモンズ：君のほうが先に歌えよ。

モード：いや，君のほうが先だ。

フィッツシモンズ：どうも君はハリーじゃないな—

モード：〔あわてて。〕 わかった，歌うよ。あそこにすわって背中を向けていて。

〔フィッツシモンズは，言われた通りにする。〕

〔モードは，右手のテーブルのほうへ歩いていく。モードが歌いだそうとしたとき，フィッツシモンズの巻きタバコ入れに気づき，それを拾いあげ，わきを向いてそこに書かれた彼の名前を読んで，口をきく。〕

モード：「ロバート・フィッツシモンズ。」僕がここにいたことを僕の兄に証明することになるね。

フィッツシモンズ：早く。

〔モードは，あわてて巻きタバコ入れをポケットに入れて，歌い始める。〕

歌

〔歌のあいだ，フィッツシモンズはゆっくりと頭をひねって，モードを見ながら感嘆の気持ちをつのらせていく。〕

モード：どうだった？

フィッツシモンズ：〔無愛想に。〕 くだらない。少年の声だと誰でも言えるさ―

モード：おー！

フィッツシモンズ：がさつで，品がなく，高い音のところはみな嗄(しわ)がれていた。

モード：おー！　おー！

〔気を落ち着けて，肩をすくめながら。〕 まあ，よかろう。それじゃ，僕の歌と比べて，君はバッグではどれだけやれるのか見てみようじゃないか。

〔フィッツシモンズは，上着を脱ぎ，披露をする。〕

〔モードは，夢中になって感嘆しながら，眺める。〕

モード：〔彼が終えると。〕 みごと！　みごとだ！

〔フィッツシモンズは上着を着ると，進み出て，テーブルの近くにすわる。〕 体をしなやかにするのにバッグほどいいものはないね。闘鶏のような気分になっているよ。ハリー，２人で飲み騒ぎに行こうよ。

モード：な―ん―だっ―て？

フィッツシモンズ：１杯だよ。ほら…昔君がよくやってたえらく騒々しい夜の１つさ。

モード：〔革の椅子から新聞を拾いあげると，すわって，膝の上にのせ，言葉に力を入れて。〕 そんなことはもうやらないよ。僕は…僕は改心したんだ。

フィッツシモンズ：君は，よく猛烈に面白半分に車を乗りまわしたもんだよな。

モード：わかってるさ。

フィッツシモンズ：それに，いつもかわいい女の子を１人か２人と一緒だったよな。

モード：〔男のように，大げさに。〕 ああ，今だってしたい放題にやってるさ。君のほうは，誰か…ええっと，…そのー…いい子を知ってるかい？

フィッツシモンズ：もちろんさ。

モード：教えろよ。

フィッツシモンズ：いいとも。ジャック・シルヴェスターって知ってるだろ？

モード：〔自制心を失って。〕 彼は私の兄―

フィッツジェラルド：〔激高して。〕 何だって！

モード：…義理の１番めのいとこさ。

フィッツシモンズ：おー！

モード：だから，彼のことはあまりよく知らないってわけ。１度出会っただけさ…クラブでな。一緒に飲んだんだ。

フィッツシモンズ：それじゃ，彼の妹のことは知らないかい？

モード：〔びくっとして。〕 妹？　ぼ…僕は，彼に妹がいるなんて知らなかったな。

フィッツシモンズ：〔熱っぽく。〕 すてきな人なんだ。女王だな。そりゃあ，すばらしい。す…んばら―しいよ。

モード：〔うれしくて。〕 そうなのかい？

フィッツシモンズ：面白い人だ。ぜひ知りあえばいい。

モード：〔こっそりと。〕 それじゃ，彼女のことを知ってるのかい？

フィッツシモンズ：もちろんだよ。

モード：〔わきぜりふ。〕　おお，ほう！〔フィッツシモンズに対して。〕　彼女のことをえらくよく知ってるの？

フィッツシモンズ：覚えられないぐらい何度も彼女を連れ出したさ。きっと，君も彼女のことを気に入るよ。

モード：そりゃどうも。彼女のことをもう少し話してみてよ。

フィッツシモンズ：ちょっと派手な身なりでね。でも，そんなことは気にならんさ。それから，何をしようと，食事には連れ出すんじゃない。

モード：〔悔しさを隠しながら。〕　どうして？

フィッツシモンズ：あんな旺盛な食欲見たことないよ―

モード：おお！

フィッツシモンズ：まったくうんざりするよ。あの子は，きっとさなだ虫（「大食い虫」）を抱(かか)えているにちがいない。それに，自分で歌えると思っている。

モード：ええ？

フィッツシモンズ：くだらん。君のほうがいい声をしてるし，ありゃあ大したことない。彼女は，たしかにいい子だが，家族の厄介者さ。おかしいよね？

モード：〔力のない声で。〕　そう，おかしい。

フィッツシモンズ：彼女の兄のジャックは大丈夫だ。が，彼女とは太刀打ちできない。彼女…は―

モード：〔むっつりして。〕　それで。続けて。

フィッツシモンズ：えらい厄介者でな。少年院に入って当然さ。

モード：〔ぱっと立ちあがって，彼の顔に新聞を打ちあてて。〕　おお！　おお！　おお！　あんたって嘘つきだ！　彼女は，まるでそんなんじゃないよ！

フィッツシモンズ：〔この猛攻撃から立ち直って，怒ったふりをして，脅すようにモードに進み寄り。〕 さあ，君を押さえこみにかかるか。この若いよた者よ。

モード：〔驚きと悔恨の気持ちがいっぱいになって，彼からあとずさりしながら。〕 やめるんだ！　お願いだからやめてくれ！　すまなかった！　謝るよ。わ…わるかったよ，ボブ。ただ，女の子があんなふうに言われるのを聞きたくないんだ。たとえ…たとえそれがほんとうであっても。わかってなくっちゃ。

フィッツシモンズ：〔気が治まって，座席にすわり直すと。〕 君はずいぶん変わったな，まったく。

モード：〔革の椅子に腰をおろして。〕 心を入れ替えた，って言っただろ。何かほかのことについて話そうよ。女の子がプロボクサーを好きなのは，どうしてなんだい？　僕は思うんだが…うふん…つまり，僕には，女の子ならプロボクサーを忌まわしいと思うだろう，と思えるんだが。

フィッツシモンズ：連中が男だからさ。

モード：でも，試合では不正がずいぶんと多い。そんなことは，しょっちゅう耳にするし。

フィッツシモンズ：どんな仕事や専門職にだって，不正な連中はいるものさ。最も優れたボクサーは，不正はしないけど。

モード：ぼ…ええ…僕は，いかさまをやるだけの見返りがあるときには，みんながそうするんだと思ったよ。

フィッツシモンズ：最も優れたボクサーは，そうじゃないな。

モード：君は，…えー…いかさま試合をやったことがあるの？

フィッツシモンズ：〔鋭くモードを見つめ，それからまじめに口を開く。〕 そう。1回だけ。

モード：〔ショックを受けて，悲しそうにこう言う。〕 僕はいつだって君のことを話に聞いていて，絶対いかさまなどやらない唯一の潔白なチャンピオンだと思ってた。

フィッツシモンズ：〔そっとまじめに。〕 その1回だけについて話そう。オーストラリアでのことだった。苦労しながら活路を見いだし始めたばかりの頃だった。ラッシュカッターズ湾で老ビル・ホウバートとやった時だ。僕は，その試合でわざとビルに負けたんだ。

モード：〔不快になり，あきれ返って。〕 ええ！　そんなことを君がするなんてあり得ない。

フィッツシモンズ：そのことについて話そう。ビルは，老練なボクサーだった。老人，というんじゃなくってね，長らくボクシングの試合にかかわってたんだ。年は38ぐらいだったが，これほど闘志のある男がリングに上がったことなどなかった。ところがビルは，運が悪かった。もっと若いボクサーたちが出てきて，締めだしを食ってたんだ。その頃，あまり試合に出られず，懸賞金も少なかった。おまけに，オーストラリアでは旱魃（かんばつ）の年だった。どういうことかわからんだろ。つまり，未開拓地の警備隊員たちが飢えているということだ。つまりは，羊が飢えて何百万頭と死ぬということさ。つまり，金も仕事もなくて，男や女や子供らが飢えるということなのさ。

ビル・ホウバートには女房と３人の子供がいて，僕との試合の時には全員が飢えていた。食べる物が十分なかったんだ。わかるかい？　食べる物が十分になかったんだ。それに，ビルにも食べ物が十分になかった。腹をすかして練習をしたんだが，そんなんじゃ，まったく練習にもならないって認めるだろ。あの旱魃の年のあいだ，リングには十分な金がほとんどなくて，ボブはどんな試合も手にできなかった。波止場人足，溝掘り，石炭すくい…どんな仕事にだって従事して，女房と子供たちを養わねばならなかった。厄介なことに，そうした仕事も長続きはしなかった。そこへ，家賃が滞っているなか，僕との試合が組まれて，タフな老まな板（ボクシング用語で，烈しい打撃に耐えられるボクサー）だが，食べ物不足で体が弱っていた。もしボブがその試合に勝たなければ，家主は一家をほうり出すつもりだったんだ。

モード：でも君は，そんな弱った状態にあるボブと戦いたいと思ったのかい？

フィッツシモンズ：知らなかった。試合直前のリングサイドに出る前まで知らなかったんだ。それぞれの更衣室にいて，始まる順番を待ってた。ビルは，リングに向かう準備をして，自分の部屋から出てきた。「ビル」と僕は言った…面白半分にな。「ビル，今夜は君をやっつけなくっちゃな。」彼は何も言わずに，僕がそれまで見たこともない悲しくみじめな顔をしながら僕を見たよ。彼は，自分の更衣室へともどって行って，腰をおろしたんだ。

「かわいそうなビル！」と，僕のセコンドの１人が言った。「彼は，このところ何週間も相当ひもじい思いをしてるんだ。確かな話じゃ，今夜負ければ，家主は彼をおっぽり出すんだと。」

それから呼びだしがあって，２人はリングに入った。ビルは，もう死にもの狂いだった。その戦いぶりは，虎みたい，狂人だったよ。まさしく狂気じみていたな。僕以上の戦いぶりだった。僕は日の出の勢いのボクサーだったし，お金や認められることのために戦っていた。でもビルは，生きるため…最愛の家族の生活のために戦っていたんだ。

それから，体調がビルに堪（こた）えてきた。力が抜けていったのに，僕ときたら雛菊（ひなぎく）みたいに元気だった。「どうしたんだ，ビル？」クリンチの時に彼に言ってやった。「元気がないね。」「きょうは，

何も食っちゃいねえんだ。」とビルが答えた。それだけだった。

第７ラウンドまでにビルはもうへとへとになっており，クリンチになるとしがみついてきて，あえぎあえぎしていた。それで，もういつだってノックアウトできると思ったよ。右を引きつけて腕を曲げてのジャブを打てば，それでやっつけられるというわけだ。ビルにはジャブが出てくるのがわかっていたし，それを防ぐ力もなくなっていた。

「ボブ，頼むから」とビルが言った。それから…〔途切れ。〕

モード：それで？　それで？

フィッツシモンズ：僕はパンチを控えたさ。２人はクリンチになった。

「ボブ，頼むから」とビルはまた言った，「女房と子供たち！」

まさにそのとき，僕は何もかも見て取ったんだ。腹をすかした子供たちが眠っているのや，女房が寝ずに起きてビルが帰ってくるのを待ちながら，食べ物が手に入るのかそれとも放り出されてしまうのかがわかるのを待っている様子をな。

「ビル」と僕は，次のクリンチの時に言ったよ。彼にしか聞こえない小さな声でな。「ビル，ラ・ブラーンチ打法（カナダのボクサー，ジョージ・ラ・ブラーンチの得意とした軸足打法）のこと覚えてるだろ。あれを僕に打ってみな，強くな。」

２人がブレークすると，ビルはひょろついてグロッギー状態だった。彼はよろよろと離れると，あの打法でグラブを振りまわしだした。僕にはパンチが飛んでくるのが見えた。見てないふりをして，ラッシュをかけて彼のあとを追った。ピシャッ！　強打が僕のあごをとらえて，僕はダウンした。僕は若くて強健だった。パンチにやられてしまうことはなかった。最初の１秒でもう立ちあがれただろう。でも，そのまま横たわって，ノックアウトを宣告させた。そして僕は，まだぼーっとした状態にあるふりをして，セコンド陣にコーナーまで運ばせ正気づかせるようにさせたんだ。〔途切れ。〕

そう，あの試合でいかさまをやったのさ。

モード：〔フィッツシモンズに飛びつき，彼の手をつかんで。〕　よかった！　ああ！　君は男だ！　あ…あ…あ，英雄だ！

フィッツシモンズ：〔冷ややかに，ポケットの中を手さぐりしながら。〕　一服吸うことにしよう。〔巻きタバコ入れが見つからない。〕

モード：そんな話をしてくれて僕がどんなにうれしいかわからないよ。

フィッツシモンズ：〔ぶっきらぼうに。〕 忘れろ。〔と言ってテーブルの上に目をやるが，巻きタバコ入れが見つからない。うさん臭そうにモードを見て，それから右手の机のほうへと突っきっていって，電話に手を伸ばす。〕

モード：〔怪訝（けげん）そうに。〕 何をしようとしているんだい？

フィッツシモンズ：警察を呼ぶんだ。

モード：何のために？

フィッツシモンズ：君だよ。

モード：僕のために？

フィッツシモンズ：君はハリー・ジョウンズじゃない。それに，君はいかさま師であるばかりか，こそ泥でもある。

モード：〔憤然として。〕 よくもまあそんなことを。

フィッツシモンズ：君は，僕の巻きタバコ入れを盗んだ。

モード：〔思い起こしてぎょっとして，巻きタバコ入れを取り出す。〕 ここにあった。

フィッツシモンズ：もう手遅れさ。救われないよ。ここのクラブは，ちゃんとした所でないといけない。こそ泥なんか大目に見られない。

モード：〔驚きをつのらせて。〕 でも，僕を逮捕させないんだろ？

フィッツシモンズ：無論させるさ。

モード：〔せがむように。〕 頼む！　頼むから！

フィッツシモンズ：〔頑固に。〕 逮捕させちゃいけない訳などないだろが。

モード：〔あわてふためいて。〕 訳を言うよ。…当（とう）…当（とう）を得た訳だよ。ぼ…僕…は，ハリー・ジョウンズじゃないんだ。

フィッツシモンズ：〔不機嫌に。〕 それだけで警察を呼び寄せるに足る理由になるさ。

モード：そんな訳じゃないんだ。僕は…な…ああ！　情けないったらありゃしない。

フィッツシモンズ：〔きびしく。〕 情けないと思って当然さ。〔電話の受話器に手を伸ばす。〕

モード：〔死にもの狂いになって。〕 待って！　私は…私は…女なの。あーあ！〔と言って，顔を両手でおおいながら，がっくりと椅子にくずおれる。〕

〔フィッツシモンズは，受話器を置きながら，ブツブツ言う。〕

〔モードは，両手を引っこめて，ぷりぷりしながら彼を見る。噴りがつのる。〕

モード：私は，自分がここに来ていたことを兄に証明するために，あなたの巻きタバコ入れが欲しかっただけなの。私…私はモード・シルヴェスターで，あなたは私を１度も連れ出したりしてないわ。それに私は，面汚しなんかじゃない。それから，派手な服装もしてないし，さ…さなだ虫（前出 p. 128）だって抱えちゃいないわ。

フィッツシモンズ：〔にやにや笑って，チョッキのポケットから名刺を出しながら。〕 君がシルヴェスター嬢だということは，ずっとわかっていたよ。

モード：まあ！　人でなし！　もう２度と口をきかないわ！

フィッツシモンズ：〔優しく。〕 ここから無事に出してあげるよ。

モード：〔心が解けて。〕 えーえーえ。〔彼女は立ちあがって，テーブルのところまで行き，マントとボンネットを取ろうとまさに前かがみになろうとするが，フィッツシモンズがその出鼻をくじいて，マントをつかんで，彼女が着るのに手を添えてやる。〕 ありがとう。〔彼女はかつらを外して，地髪をふわりと上品にふくらませ，ボンネットをかぶり，もう隅から隅まできれいな若い女に見えて，いつでも自動車に乗る態勢ができていた。〕

フィッツシモンズ：〔は，ずっと，モードの変わりようを見守りながら，恥ずかしそうにしており，次には巻きタバコ入れを彼女に手渡しながら。〕 さあ，巻きタバコ入れだよ。君が取―取―っておいていいよ。

モード：〔フィッツシモンズを見て，躊躇（ちゅうちょ）し，それから巻きタバコ入れを受けとる。〕 どうもありがとう…あのー…ボブ。生涯ずっと大事にするわ。〔彼はひどく当惑する。〕 あら，きっとあなた恥ずかしがってるのね。どうしたの？

フィッツシモンズ：〔口ごもりながら。〕　だって…僕…君…君は女の子…それも…す…す…すごくきれいな子だもん。

モード：〔ドアのほうに向かおうと，彼の腕を取って。〕　でも，あなたは初めっからわかっていたんでしょ。

フィッツシモンズ：それにしても，今君が女の子の身なりをすると，なぜか違うんだよね。

モード：でも，あなたは少しも恥ずかしがってなかったわ，あのとき…というか親切じゃなかったわ。あのとき…あな…あなた…は，〔うっかり口をすべらせて。〕　母斑（ぼはん）が右だったか左だったかをしきりに知りたがってたもの。

〔２人は退場しはじめる。〕

幕

「女人禁制のボクシング・ジムに男装の麗人登場」〈（寸劇）「母斑（ぼはん）」〉訳者ノート

拙著『翻訳こぼれ話』（明文書房）を2015年11月に出版の際，最新の拙訳例として添えたのがJ・ロンドンの「人間の漂流」（“The Human Drift”）と題する優れたエッセイであった（まずその前―2015年７月―に『立命館経済学』第64巻第２号に掲載）。同名の書 *The Human Drift* を入手してみると，「全８作中最後から２番めにこの “A Wicked Woman” が唯一 Cuntain Raiser として入っていた――」と記した通り，初めてロンドンの戯曲の翻訳を「よこしまな女」と題して『立命館経済学』第66巻第３号〈2017年９月〉に発表する機会に恵まれた。男女の恋愛をめぐる一種の喜劇だが，ロンドンのまた別の側面が窺える作品ではある。

さて，*The Human Drift* の最後に収まっているのが，本作 “The Birth Mark” である。自然の成り行きで，「よこしまな女」の次の作品であり，おまけに同じ戯曲というジャンルでもあるので，もうひと踏んばりしてみることと相成った。

戯曲の原題は，“The Birth Mark”。文字通りには，「（生まれつきの）あざ，ほくろ；母斑（ぼはん）」あたりだろう。なるほど作品を読み進めば，p. 124に確かに出てはくるが，あまり馴染みがないので，邦訳題の通りやや長くはなったが，ご容赦いただきたい。なお，劇中の（……）８ポイントの注は，訳注である。

男の振りをして女人禁制のボクシング・ジムに入っていくモード・シルヴェスターの様子から始まり，ボクサーのロバート・フィッツシモンズとのやり取りや化かしあいを読んでいくと，われわれ現代人は一種奇異の感に打たれる。何と言っても，ボクシングがなぜ女人禁制？　との疑

問が頭をもたげる点である。

実はロンドンは，自らもボクシングに興じ，何度も観戦し，記事もいくつも新聞に寄せており，おまけに4つのボクシング小説まで書き残しているほどのボクシング通なのである。戯曲はともかく，それら4つの小説すべてを過去（1987年7月）に拙訳で世に問い，好評を得た。〈『試合―ボクシング小説集』現代教養文庫〉詳細はそちらに譲るとして，最初の「試合」という作品について，「ジェネヴィーヴが男装して入場し，恋人ジョウの最後の試合を観戦する場面は印象的で，今日ではまったく考えられない光景である。ボクシング史の変遷を証言し実感できる好例……」と，訳者あとがきに記している。そんな時代背景・状況がわかれば，本戯曲についての理解も容易になるだろう。

さらには，フィッツシモンズが後半でモードに語って聞かせるビル・ホウバートの貧窮生活および彼との一戦でやったいかさまの詳細な話は，ロンドンのもう1つの名作――都合200篇ほどの短篇群の中でも，ひときわ光彩を放つ作品――「ひと切れのビフテキ」(1909) を彷彿させる。この短い戯曲の中でも，女人禁制の話とこのエピソードとは，まさに圧巻と言えよう。

ご参考までに，「よこしまな女」で紹介した *A Definitive Chronology* (1992) によれば，1910年7月10日に "Jack entertains Mr. and Mrs. Bob Fitzsimmons." とあり，さらには同年7月26日には "Miss Backrack brings "The Birth Mark" to Charmian〔The Skit Jack has written for Bob and Julia Fitzsimmons〕." とも出ている。

最後にひと言。「よこしまな女」の折と同様今回も，親切なアドヴァイスをあれこれ頂戴した。カリフォルニア州はサン・マリーノウにあるハンティントン図書館のナタリー・ラッセル (Natalie Russell) 女史である。筆者が1992-93年の留学時に40日ほど通った高名な図書館だが，その時の学芸員がスー・ホドスン (Sue Hodson) 女史だった。その彼女も近頃定年退職されて，代わりに紹介を受けたのがラッセル女史― Assistant Curator of Literary Collections ―だった。この場をお借りして，厚く御礼申しあげたい。